

『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字書き分けの原則

——u/üを表す漢字を事例として——

On the Rule of Using Chinese Characters Denoting Mongolian Words in the Secret History of the Mongols

栗林 均 (Hitoshi KURIBAYASHI)*

キーワード：元朝秘史、モンゴル語、音訳、漢字の書き分け

はじめに

『元朝秘史』はチンギス・カンの一代記を中心にまとめられたモンゴルの歴史書で、13世紀に成立したと考えられる。原本はモンゴル文字で書かれていたであろうが、現存するのは14世紀の後半に漢字をもってモンゴル語の発音を写した「漢字音訳本」とよばれるものである。したがって、『元朝秘史』のモンゴル語に接するには漢字の表記を介さずには不可能であり、たとえローマ字に転写されたモンゴル語を扱うにしても、元の漢字表記がどのようにしてローマ字に変換されたのかという転写の方式について理解しておく必要がある。漢字をローマ字に転写する利点としては、可読性の向上、印刷・表記の容易さに加えて、表記の単位を音に分解して扱う利便さなどが考えられるが、逆に漢字をローマ字にすることによって切り捨てられてしまう側面もあることを忘れてはならないであろう。

本稿では、『元朝秘史』において同じ音を表すのに使われている複数の漢字がどのように使い分けられているかというひとつの事例を取り上げることによって、ローマ字転写では決して表面に出ることのない漢字の表記上の特徴について検討する。

1.

服部四郎氏は、『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』（東京、1946）において、モンゴル語を表記する漢字のローマ字転写の種類と方法について、次の3種類の方式を区別することを論じ、それぞれの転写を第一種、第二種、第三種と呼んだ（同書27-35頁）。

- (1) 漢字の表はす音訳当時の支那語音による転写
- (2) 漢字の表はす蒙古語音による転写
- (3) 支那語音と蒙古語音と両方を参照し、同じ漢字はいつも同じ音素文字で表はす簡略転写。

* 東北大学東北アジア研究センター

これらのうち、第一種転写(1)は漢字音を当時の漢語(中国語)の体系の中で捉える方式で、漢語の音声・音韻として表記される。同書139-144頁に附録として付されている「音訳漢字順位表」には、『元朝秘史』のモンゴル語を表記しているすべての漢字について中国の同時代の韻書資料を手がかりに研究した結果得られた音価が示されている。

第二種転写(2)は、それらの漢字がどのようなモンゴル語の音声・音韻を表していたか、当時のモンゴル語の体系の中で捉える方式で、モンゴル語の音声・音韻として表記される。『元朝秘史』の研究で、白鳥(1943)、Pelliot(1949)、Ligeti(1971)、小澤(1984-1986, 1987-1989)らによってこれまでに提示されたローマ字転写はこの方式とみなすことができる。

これに対して第三種転写(3)は、第一種と第二種の間位置する便宜的な転写方式である。この転写方式の狙いと最大の利点は、ローマ字表記から元の漢字表記面を復元できることである。第一種と第二種の転写を考慮しながら「同じ漢字はいつも同じローマ字表記をする」際の具体的な方針は次のように説明されている(服部上掲書30-31頁)。

- 1) 当時の漢字音として複数の音価を持つと推定される漢字についても、ひとつの漢字はひとつのローマ字表記とする。同様に当時のモンゴル語の複数の音を表していると推定される漢字についても、ひとつの漢字はひとつのローマ字表記に決める。
- 2) モンゴル語の音を参照しながらローマ字面を極度の簡略にし、できるだけ普通のローマ字を使う。
- 3) 同じローマ字で転写される漢字は、画数の少ないものから多いものへと並べ、画数の同じものは康熙字典の配列順序に従う。

服部(1946:31)によれば、Haenisch(1937)のローマ字転写方式はこの第三種転写に近いが、Haenischのローマ字転写は同じ漢字表記であっても場合によって別のローマ字を当てるなど、第三種転写と完全に同じものではない。

服部(1946:139-144)の「音訳漢字順位表」には、『元朝秘史』でモンゴル語を表記するのに用いられている全563種類の漢字が一覧として掲げられている。この中には「阿、埃、俺、安、奥、巴、白、班、保、別、…」といった一般の漢字だけでなく「ト、楊、克、勒、木、你、児、思」等、音節末の子音を表記するのに用いられる「小字」や、「^ㄗ合、^ㄗ豁、^ㄗ忽、^ㄗ渾」等および「^ㄗ刺、^ㄗ列、^ㄗ里、^ㄗ羅、^ㄗ魯、^ㄗ来」等のように、「^中、^舌」といった「小字と他の漢字の組み合わせ」も含まれている。これらも「モンゴル語を表記する」という観点からすれば、他の漢字と同様に機能しているひとつの単位である。

「音訳漢字順位表」に列挙されている563種類の漢字には、それぞれに「第一種」と「第三種」という2種類のローマ字転写が付され、第三種のローマ字面に従って排列されている。ここでは議論の前提として「音訳漢字順位表」を手がかりに、『元朝秘史』におけるモンゴル語の漢字表記の性格について確認しておきたい。以下、ローマ字転写は特に断りの無い限り、第三種を指す。

「音訳漢字順位表」で目立つのは同じローマ字で転写される漢字が少なくないことである。上述のように、「同じローマ字で転写される漢字は、画数の少ないものから多いものへと並べ、画数の同

じものは康熙字典の配列順序に従う」という原則によって配列され、同じローマ字表記になるものは、ローマ字転写の右肩に1から順に番号が振られている。

表1. は、服部（1946：117-127）の「第十三章 結論」の冒頭に掲げられている「全音訳漢字とその使用頻度」の最初の部分から、『元朝秘史』でモンゴル語を表記するのに使用されている漢字とその第三種ローマ字転写との関係を表にしたものである（注1）。表の中の「漢字の種類」は、同じローマ字で転写される漢字がいくつあるかを示している。

表1. 『元朝秘史』において同じローマ字で転写される漢字（一部）

第三種ローマ字転写	同じローマ字で転写される漢字	漢字の種類
a	阿	1
ai	唉 埃	2
am	俺 俺	2
an	安	1
ang	昂	1
au	奥	1
b	ト	1
ba	八 巴 把 杷 罷	5
bai	白 伯 拜 擺	4
ban	班 般	2
bang	邦	1
bau,	保 鵠	2
be	別	1
bei	北	1
ben	邊	1
bi	畢 鶻	2
bin	賓	1
bo	孛 駢	2
bu	卜 不 步 捕 撲 僕	6
bui	備	1
bun	奔	1
...

この転写方式によれば、『元朝秘史』のモンゴル語を表記している漢字が区別している「音」の種類は292種類である。ここでいう「音」とは、表1.の中で「第三種ローマ字転写」として左端の欄に並べている a, ai, am, an, ang, ba, bai, ban, bau, be, ... といった音節と b, d, g, l, m, n, r, s 等の音節末尾の子音のすべてである。これを「漢字が表す音」とすれば、表1.の「同じローマ字で転写される漢字」というのは「同じ音を表す漢字」と言い換えることができる。

上に見たように、『元朝秘史』では563種類の漢字によって292種類のモンゴル語の音が表記されている。これは、同じ音を表す漢字がいくつもあることを意味している。実際、表1.で見たように、同じ音を表すのに、4種類、5種類、6種類の漢字が使われている場合もあることが分かる。

次に、『元朝秘史』の漢字表記で区別されている292種類のひとつひとつの音に対して、それぞれいくつの漢字が用いられているかを表2.に示す。

表2.『元朝秘史』で同じ音を表す漢字の数

同じ音を表す漢字の数	種類
1	145
2	79
3	33
4	22
5	7
6	5
7	0
8	1

上の表で「同じ音を表す漢字の数」が「1」というのは、前頁の表1.の右端の欄の数字が「1」の場合にあたり、これは全部で145例ある。つまり、モンゴル語の292種類の音のうち、ひとつの音を表すのにひとつの漢字だけが使われているのは145例で、全体の約半分に過ぎない。同様に、同じ音を表すのに2つの漢字が使われているのは79例、3つの漢字が使われているのは33例あることが分かる。

具体的に、どのような音を表すのにどのような漢字が使われているか、同じ音を表す漢字の数が多い順に並べたのが次頁の表3.である。

これをみると、同じ音を表すのに一番多くの漢字が使われているのは、*ši*を表す「失、石、拭、食、實、濕、識、釋」という8つの漢字である。次に多いのはひとつの音に対して6種類の漢字が用いられているもので、それらは *bu*を表す「卜、不、歩、捕、鑊、僕」、*i*を表す「亦、宜、翊、翼、驛、趯」、*ri*を表す「^舌里、^舌理、^舌禮、^舌離、^舌癪、^舌驪」、音節末音の *r*を表す「児、^舌児、^舌洎、^舌洎、^舌岨、^舌岨」、*u*を表す「兀、岨、兀、涸、閤、鳴」となっている。

表3. 『元朝秘史』で同じ音を表す漢字（一部：種類の多い順）

漢字の表す「音」 (音節、音節末子音)	左の音を表す漢字	同じ音を表す 漢字の数
ši	失 石 拭 食 實 濕 識 釋	8
bu	卜 不 歩 捕 撲 僕	6
i	亦 宜 翊 翼 驛 趯	6
ri	舌里 舌理 舌禮 舌離 舌攣 舌驪	6
r	兒 舌兒 沍 舌沍 峇 舌峇	6
u	兀 岨 硯 渥 閏 鳴	6
ba	八 巴 把 杷 罷	5
da	打 怛 荅 達 搭	5
de	咥 埴 迭 経 跌	5
go	戈 果 哥 葛 歌	5
lu	祿 魯 駱 爐 臚	5
qun	中坤 中昆 中崑 中渾 中鵠	5
so	梭 莎 雪 潰 鎖	5
bai	白 伯 拜 擺	4
čen	塵 禪 纏 躔	4
či	叱 吃 池 赤	4
čing	丞 成 誠 稱	4
...

このように、モンゴル語の同じ音を表すのに2つ以上の漢字が使われているのには、何か理由があるのだろうか？

陳垣氏は、『元秘史譯音用字攷』（北平、1934）で、『華夷訳語』におけるモンゴル語の漢字音訳方式が発音だけを表した単純な音訳であるのに対し、『元朝秘史』の漢字音訳方式は音だけでなくモンゴル語の意味を加味した漢字を選んで使っている点に特徴があると指摘して、『元朝秘史』における「モンゴル語の意味を考慮した漢字音訳方式」の実例を詳細に調査し、分類している。その典型的なひとつの例として、『華夷訳語』では「兀」と表記されているものが『元朝秘史』ではモンゴル語の「山」を表す単語では「阿岨刺」と山偏の「岨」の漢字を用い、モンゴル語の「湖」を表す単語では「納渥兒」と水に関係する「渥」の字を用い、モンゴル語の「話す、語る」を表す単語では「鳴訖列」と口偏の「鳴」の字を用いていることが指摘されている。

『元朝秘史』における「モンゴル語の同じ音を表すのに2つ以上の漢字が使われている」状況は、

このような「意味を加味した漢字の使用法」と関連していることは疑いない。しかし、こうした「意味を加味した漢字の使用法」がどの程度に行われているのかについては必ずしも明らかであるとは言えない。たとえば、『元朝秘史』ではモンゴル語の「山」を表す単語が「阿𡿨刺」と表記されている例があるのは確かであるが、「阿兀刺」のように山偏のつかない「兀」が使われている例もまた存在している。「阿𡿨刺」と「阿兀刺」の表記のうち、一方が規則的で他方が例外と見なしうる程度の使い分けの差は存在するのだろうか？換言すれば、「意味を加味した漢字の使用法」は一貫した原則に基づいて行われているのであろうか、それとも散発的に現れる表記なのであろうか？また、「𡿨」という漢字はモンゴル語の a'ula 「山」という語にしか用いられていないのであろうか、それとも別の語の表記にも用いられているのであろうか？さらに、「モンゴル語の同じ音を表すのに2つ以上の漢字が使われている」状況は、すべて「意味を加味した漢字の使用法」に起因するものなのか、あるいはそれ以外の理由もあるのか、という疑問も生じる。

こうした疑問に答えるためには、ひとつの音あるいはひとつの漢字に関して、全巻を網羅的に調査しなければならない。本稿では、「モンゴル語の同じ音を表すのに2つ以上の漢字が使われている」事例のひとつとして、取り上げて、『元朝秘史』におけるそれぞれの漢字の使用状況を全巻にわたって網羅的に調査し、それらの使い分けの実態を明らかにする。

2.

ここでは、モンゴル語の u/ü という音節（服部氏の第三種転写では u）を表すのに用いられている漢字を取り上げる（注2）。

『華夷訳語』ではモンゴル語の u/ü を音訳するのに使われている漢字は「兀」1種類しかない。これに対して『元朝秘史』では「兀」「𡿨」「𡿨」「𡿨」「𡿨」「𡿨」という6種類の漢字が使われている。『元朝秘史』におけるそれらの出現回数は次の通りである：

兀 — 4,265回（注3）

𡿨 — 451回

𡿨 — 26回（注4）

𡿨 — 25回

𡿨 — 23回（注5）

𡿨 — 1回

使われている漢字によって使用回数が極端に偏っていることが分かる。6種類の漢字の中で最も多く使われているのは「兀」であり、使用回数は全体の約9割（89.0パーセント）に達している。次に多く用いられているのは「𡿨」で、全体の1割弱（9.4パーセント）である。残りの4字（「𡿨」「𡿨」「𡿨」「𡿨」）に関しては、使用回数はそれぞれ全体の1パーセントにも満たない。これにより、『元朝秘史』でモンゴル語の u/ü を表す漢字として最も一般的に用いられているのは「兀」であ

り、「𠬞」「𠬞」「𠬞」「𠬞」の4字が用いられているのは特殊な場合ではないかという予想が成り立つ。以下、それぞれの漢字がどのように使われているか、具体的な調査の結果を示し、検討する。

2-1.

漢字「兀」は、『元朝秘史』全巻を通して4,265回現れる。「兀」は、上に見たようにモンゴル語の音節 u/ü を表すのに最も多く使われる漢字であり、男性語と女性語に関わりなく、また語頭、語中、語末、語尾（接尾辞）いずれの位置にも用いられている。品詞や意味による使用の制限も認められず、『元朝秘史』でモンゴル語の音節 u/ü を表す最も一般的な漢字として用いられている。これを表4. に示す。（注6）

表4. 『元朝秘史』における漢字「兀」の使用状況

使用される条件	漢字	使用例	出現回数
「u/ü」を表す音節 (男性語、女性語； 語頭、語中、語末、 語尾)	兀	兀孫 (usun, 水)、兀格 (üge, 言語) 兀訥罷 (unu=ba, 騎了)、兀者罷 (üje=be, 見了) 兀兀児 ^甲 合 (u'urqa, 套馬竿)、卯兀 (mawu, 歹) 保兀罷 (bawu=ba, 下了)、迭兀 (de'ü, 弟) 阿主兀 (a=ju'u, 有来)、亦 ^𠬞 列主兀 (ire=jü'ü, 来了) 等々。	4,265

2-2.

漢字「𠬞」は、『元朝秘史』全巻を通して451回使われている。その内訳は、モンゴル語の動詞 ügüle=「話す、語る」の活用形に421回、その派生語である相互態動詞 ügüleldü=「語り合う」の活用形に20回、受動態動詞 ügülekde=「語られる」の活用形に8回、使役態動詞 ügüle'ül=「語らせる」の活用形に2回となっている。それらの語形と使用回数を列挙すれば次の通りである。例は漢字音訳表記に続けてかっこの中にローマ字転写形、漢字傍訳形、出現位置を示す（注7）。

(1) 動詞 ügüle=「話す、語る」の活用形：421回

- 𠬞詰列 (ügüle=, 説 01:33:05 他) 16回。（注8）
- 𠬞詰列罷 (ügüle=be, 説了 01:21:03 他) 5回。
- 𠬞詰列畢 (ügüle=bi, 説了 01:12:06) 1回。
- 𠬞詰列額速 (ügüle=esü, 説呵 01:21:02 他) 6回。
- 𠬞詰列額_𠬞 (ügüle=et, 説了 07:42:01) 1回。
- 𠬞詰列古 (ügüle=gü, 説 11:31:04 他) 4回。
- 𠬞詰列周 (ügüle=jü, 説着 01:33:03 他) 33回。
- 𠬞詰列主兀 (ügüle=jü'ü, 説了有 07:09:09 他) 3回。

鳴訖列主為 (ügüle-jü'üi, 說了有 06:16:03 他) 3 回。

鳴訖列_克先 (ügüle=ksen, 說了的 03:04:06 他) 8 回。

鳴訖列_克薛泥 (ügüle=ksen-i, 說來的 05:50:06 他) 3 回。

鳴訖列_克薛_楊 (ügüle=kset, 說了的 08:15:05) 1 回。

鳴訖列_舌恢突_舌兒 (ügüle=küi-tür, 說的行 05:48:04) 1 回。

鳴訖列坤 (ügüle=kün, 說的每 09:25:02) 1 回。

鳴訖列列額 (ügüle=le'e, 說來 03:01:08 他) 4 回。

鳴訖列魯額 (ügüle=lü'e, 說來 12:04:05 他) 2 回。

鳴訖列木 (ügüle=mü, 說有 01:21:04 他) 4 回。

鳴訖列梅 (ügüle=müi, 說有 06:06:02 他) 3 回。

鳴訖連 (ügüle=n, 說 05:43:02 他) 6 回。

鳴訖列_舌論 (ügüle=rün, 說 01:08:07 他) 306 回。

鳴訖列速 (ügüle=sü, 說我 08:24:10) 1 回。

鳴訖列_楊 (ügüle=t, 說 01:13:04 他) 3 回。

鳴訖列_楊坤 (ügüle=tkün, 說您 06:45:08 他) 4 回。

鳴訖列由 (ügüle=yü, 說有 05:31:02 他) 2 回。

(2) 動詞 ügüledü=「語り合う」(ügüle=の相互態)の活用形: 20 回

鳴訖列_勒都周 (ügüledü-jü, 共說着 05:37:07 他) 3 回。

鳴訖列_勒都_克薛_楊 (ügüledü=kset, 共說來的每 05:15:06) 1 回。

鳴訖列_勒都_克先 (ügüledü=ksen, 共說了的 05:15:02 他) 3 回。

鳴訖列_勒都列額 (ügüledü=le'e, 共說來 08:17:05 他) 2 回。

鳴訖列_勒都魯埃 (ügüledü=lü'ei, 共說來 06:22:02) 1 回。

鳴訖列_勒都_舌論 (ügüledü=rün, 共說 01:10:10 他) 9 回。

鳴訖列_勒都_楊坤 (ügüledü=[t]kün, 共說 08:20:10) 1 回。(注 9)

(3) 動詞 ügülekde=「語られる」(ügüle=の受動態)の活用形: 8 回

鳴訖列_克迭古 (ügülekde=gü, 被說有 12:19:07) 1 回。

鳴訖列_克迭周 (ügülekde=jü, 被說着 05:42:05 他) 5 回。

鳴訖列_克迭坤 (ügülekde=kün, 說的每 12:49:08) 1 回。

鳴訖列_克顛 (ügülekde=n, 被說 11:35:09) 1 回。

(4) 動詞 ügüle'ül=「語らせる」(ügüle=の使役態)の活用形: 2 回

鳴訖列兀_勒周 (ügüle'ül=jü, 教說着 12:05:04 他) 2 回。

これらは、『元朝秘史』において用いられている漢字「鳴」のすべてである。

一方、『元朝秘史』において動詞 ügüle=「話す、語る」に関する語が上に挙げた以外にも使われているかどうか調査すると、『元朝秘史』全巻を通じて、ügüle=「話す、語る」の活用形およびその

派生語（使役態 ügüle'ül=、受動態 ügülekde=、相互態 ügüledü=）の活用形は453回用いられており、その内訳は、上に列挙したものが451回、それ以外には次の2例があるに過ぎない。

兀詰列額速 (ügüle=esü, 説呵 04:46:06)

兀詰列 (ügüle=, 説 11:31:03)

つまり、ügüle=「話す、語る」およびその派生語（使役態 ügüle'ül=、受動態 ügülekde=、相互態 ügüledü=）の活用形は『元朝秘史』で453例現われ、このうち第1音節の母音を表すのに「鳴」と書かれているものは451例、「兀」と書かれているものは2例である。これにより、漢字「鳴」は『元朝秘史』では動詞 ügüle=「話す、語る」およびその派生語を表記するための漢字としてのみ使われており、その使用法は徹底している。

上の2例にのみ（「鳴」ではなく）「兀」と書かれているのには、何か理由があるのだろうか？前者の場合、原文ではモンゴル語の üge ügüle=esü「言葉を話せば」という語句を「兀格兀 詰列額速」と、語の境界を間違っ音訳しており、ügüle=という動詞が認識されていなかったと考えられる。後者の場合は、「鳴」と書かれるべきところを、不注意で「兀」が書かれたものであろうか。

表5. 『元朝秘史』における漢字「鳴」の出現回数とその内訳

使われる語	漢字	例	回数
ügüle=「話す、語る」 およびその派生語 ügüledü=（相互態） ügülekde=（受動態） ügüle'ül=（使役態） の活用形	鳴	鳴詰列 ^平 論 (ügüle=rün, 説) 鳴詰列 ^克 先 (ügüle=ksen, 説了的) 鳴詰列周 (ügüle=jü, 説着) 鳴詰列 ^勑 都 ^平 命 (ügüledü=rün, 共説) 鳴詰列 ^克 迭周 (ügülekde=jü, 被説着) 鳴詰列兀 ^勑 周 (ügüle'ül=jü, 教説着) 等々。	451
	兀	兀詰列額速 (ügüle=esü, 説呵) 兀詰列 (ügüle=, 説)	2

ところで、これらの例にはすべて傍訳に「説」の字が付されている。傍訳がモンゴル語を漢字に音訳する際に関わっていたであろうことは想像に難くない。ただし、『元朝秘史』において傍訳「説」が付されているのは動詞 ügüle=に関連する語だけでなく、動詞 ke'e=/ke:=「言う」、kelele=「話す」の活用形でも傍訳に「説」の字が付されているので、この場合音訳と傍訳に一对一の対応関係を認めることはできない。たとえば「鳴詰列罷 (ügüle=be)」にも、客額罷 (ke'e=be) にも「説了」という傍訳が付されている。音訳漢字は、漢語傍訳から自動的に導き出されるようなものではないにしても、「意味を考慮した」音訳の作業は漢語傍訳に依存するところが少なくなかったと思われる。

2-3.

漢字「𡿨」は、『元朝秘史』全巻を通して 26 回現われる。その内訳はモンゴル語の名詞 a'ula 「山」およびその曲用形に 19 回、名詞 a'ula 「山」から派生した動詞 a'ulala=「山に登る」の活用形に 1 回、現れ、山名・地名を表す固有名詞の表記に 6 回使われている。それらを語形ごとに列挙すれば次の通りである。

(1) 名詞 a'ula 「山」 およびその曲用形：19 回

阿𡿨刺 (a'ula, 山 03:30:01, 04:49:05, 04:49:06, 05:28:07, 07:36:01, 07:37:03,
07:37:03, 07:38:03, 07:39:03, 07:42:06, 10:19:10, 11:01:09) 12 回

阿^中兀[𡿨]刺 (a'ula, 山 07:34:08) 1 回 (注 10)

阿𡿨刺突^舌兒 (a'ula-tur, 山行 03:30:07) 1 回

阿𡿨刺突^舌兒 (a'ula-tur, 山裏 07:42:07) 1 回

阿𡿨刺因 (a'ula-yin, 山的 07:39:02, 07:39:10) 2 回

阿𡿨刺宜 (a'ula-yi, 山行 07:42:10) 1 回

阿𡿨刺思 (a'ulas, 山毎 12:32:01) 1 回

(2) 動詞 a'ulala=「山に登る」の活用形：1 回

阿𡿨刺刺^無撒^揚 (a'ulala=qsat, 山上^了的^毎 12:07:06) 1 回

(3) 山名・地名を表す固有名詞 (「𡿨」が 2 回使われているものが 2 つある)

阿刺𡿨𡿨^揚 (Ala'u'ut, 山名 04:03:10)

幹^舌𡿨訥^因 (Or_nu'u-yin, 山名的 06:19:02)

忽刺阿訥^揚𡿨^揚李^勒荅^揚𡿨^揚塔 (Hula'anu'ut_bolda'ut-ta, 山名行 06:22:01)

土𡿨刺因 (Tu'ula-yin, 地名的 05:36:07)

これらが、『元朝秘史』における漢字「𡿨」の使用例のすべてである。

一方、『元朝秘史』においてモンゴル語の名詞 a'ula 「山」 および動詞 a'ulala=「山に登る」に関連した語 (曲用形・活用形) の現われを調査すると、全部で 23 例見出され、上記 20 例の他に次の 3 例があることが分かる (いずれも同じ形である) :

阿兀刺因 (a'ula-yin, 山的 07:32:07, 08:09:06, 08:44:03)

つまり、名詞 a'ula 「山」 および動詞 a'ulala=「山に登る」に関連した語は『元朝秘史』の全巻を通して 23 回現われ、このうちそれらの第 2 音節の u を表す漢字としては「𡿨」が 20 回使われ、「兀」が 3 回使われている。こうしてみると『元朝秘史』ではモンゴル語の名詞 a'ula 「山」に関連する語の第 2 音節の u には「𡿨」という漢字を使う規範が存在していたと考えられる。例外的な 3 例に (漢字「𡿨」ではなく)「兀」が書かれているのは、音訳漢字として山偏は無くても音に影響がないことから、不注意によって山偏を付け忘れたものであろう。

次に、固有名詞についてみると、『元朝秘史』で漢字傍訳に「山名」を含む語は 83 回現われる。

このうち、音節 u/ü を含む語は 3 例ある。それらはす上に挙げた 3 例であり、音節 u/ü は漢字「兀」で表記されている（そのうちの 2 例は「兀」が 2 回現れる）。

また、固有名詞に「地名」という漢字傍訳の付されたものは『元朝秘史』に 155 回現われる。このうち、音節 u/ü を含む語は 25 例あるが、漢字「兀」を含むものは上掲の 1 例だけで、漢字「兀」を含むものは 24 例見られる。つまり、漢字傍訳に「地名」とある固有名詞の表記に漢字「兀」が使われているのはむしろ例外的といえる。実際、土兀刺因 (Tu'ula-yin, 地名的) の Tu'ula は、河の名である。この名は、これ以外に 5 回現れるが傍訳は次のようにすべて「河名」である：

土兀刺因 (Tu'ula-yin, 河名的 02:39:06)

土兀刺 沐^舌漣訥 (Tu'ula_müren-nü, 河名河的 03:01:03)

土兀刺因 (Tu'ula-yin, 河名 03:25:03)

秃活刺因 (Tu'ula-yin, 河名的 06:25:05)

土活刺因 (Tu'ula-yin 河名的 06:27:05)

河の名前の表記に「土兀刺因」と漢字「兀」を使ったのは、音訳者がこれを山の名と誤解したためであることは疑いない。

表 6. 『元朝秘史』における漢字「兀」の出現回数とその内訳

使われる語		漢字	例	回数
a'ula 「山」の曲用形 およびその派生語 a'ulala= 「山に登る」 の活用形		兀	阿兀刺 (a'ula, 山) 阿兀刺思 (a'ulas, 山毎) 阿兀刺因 (a'ula-yin, 山的) 阿兀刺突 ^舌 兒 (a'ula-tur, 山行) 阿兀刺刺 ^黒 撒 ^楊 (a'ulala=qsat, 山上了的毎)、等。	20
		兀	阿兀刺因 (a'ula-yin, 山的)	3
固有名詞	山名	兀	阿刺兀兀 ^楊 (Ala'u'ut, 山名) 幹 ^舌 訥 訥兀因 (Or_nu'u-yin, 山名的) 忽刺阿訥兀 ^楊 孛 ^楊 答兀 ^楊 塔 (Hula'anu'ut_bolda'ut-ta, 山名行)	5
	地名	兀	土兀刺因 (Tu'ula-yin, 地名的)	1
		兀	兀魯 ^黒 塔 ^黒 (Uluq_taq, 地名) 幹 ^舌 兒 訥兀因 (Or_nu'u-yin, 地名的) 朵羅安 孛 ^楊 答兀 ^楊 塔 (Dolo'an_bolda'ut-ta, 地名行) 中 ^中 合迪 ^黒 里 ^黒 你 ^舌 魯兀訥 (Qadiqliq_niru'un-u, 地名的)、等。	24

以上を総合すれば、漢字「岍」は『元朝秘史』では名詞 a'ula「山」(およびその派生語)の第2音節の u を表記するために、またそれ以外では傍訳に「山名」と付された固有名詞で音節 u/ü を表記するため用いられている。

2-4.

漢字「渚」は、『元朝秘史』全巻を通して25回現れる。このうち、モンゴル語の名詞 na'ur「湖」およびその曲用形の第2音節の母音 u を表すのに用いられているものが14回、水名・河名を表す固有名詞の表記に用いられているものが11回ある。名詞 na'ur「湖」は、14回のうち13回までが「～湖」のように湖名を表す固有名詞とともに用いられている。それらを語形ごとに列挙すれば次の通りである。

(1) 名詞 na'ur「湖」およびその曲用形：14回

- 捕魚兒 納渚兒 (Buyur_na'ur, 水名 海子 01:32:09)
 闊漣 納渚兒 (Kölen_na'ur, 海子名 01:32:09)
 闊闊 納渚兒 (Kökö_na'ur, 青 海子 02:27:03)
 闊闊 納渚^ハ兒 (Kökö_na'ur, 海子名 03:42:04, 03:42:04)
 哈^ハ漣^ハ秃 納渚^ハ刺 (Hariltu_na'ur-a, 水名 海子行 04:18:02)
 捕魚^ハ兒 納渚^ハ兒途^ハ兒 (Buyur_na'ur-tur, 海子名 海子行 06:19:08)
 古洩兀^ハ兒 納渚^ハ刺 (Güse'ür_na'ur-a, 水名 海子行 06:27:02)
 乞赤^ハ 巴石 納渚^ハ刺 (Kičil_Baş<i>_na'ur-a, 海子名 海子行 06:28:07)
 巴^ハ渚^ハ納 納渚^ハ兒 (Baljuna_na'ur, 海子名 海子 06:43:08, 08:44:05)
 巴^ハ渚^ハ納 納渚^ハ[^ハ]刺察 (Baljuna_na'ur-ača, 水名 海子處 06:46:09)
 巴^ハ渚^ハ納 納渚^ハ刺察 (Baljuna_na'ur-ača, 海子名 海子行 08:44:06)
 納渚^ハ兒 (na'ur, 海 11:27:03)

(2) 水名・河名を表す固有名詞：11回

- 渚^ハ札 (Ulja, 水名 04:11:03, 04:12:04, 04:13:08)
 渚^ハ札因 (Ulja-yin, 水名的 04:13:09)
 渚^ハ中^ハ灰 (Ulqui, 水名 06:15:01)
 渚^ハ籠^ハ古 (Ürünggü, 水名 06:28:07)
 秃渚刺因 (Tu'ula-yin, 河名的 06:25:05)
 土渚刺因 (Tu'ula-yin, 河名的 06:27:05)
 渚刺 (Ula, 河名 11:18:09)
 納渚 (Na'u, 河名 11:18:09)
 討渚^ハ兒 沐^ハ漣 (Tawur_müren, 河名河 11:19:05)

これが『元朝秘史』における漢字「渚」の使用例のすべてである。

ここで、『元朝秘史』でモンゴル語の名詞 na'ur「湖」およびその曲用形の現われを調査すると、それらは全部で17例あることが分かる。このうち、漢字「渚」が使われているのは上掲の14回で、「兀」が書かれているものは次の3例である：

古泄兀^𐰺兒 納兀^𐰺刺 (Güse'ür_na'ur-a, 海子名 海子行 05:11:08)

乞濕^𐰺 巴失 納兀^𐰺刺 (Kišil_Baš_na'ur-a, 海子名 海子行 05:28:09)

納兀^𐰺兒 (na'ur, 海子般 07:32:03)

次に固有名詞についてみると、「水名」という漢字傍訳の付されたものは『元朝秘史』に39回現われる。このうち、音節 u/ü を含むものは17回あり、その音訳に漢字「渚」が使われているのは上掲の6回であるが、それ以外に漢字「兀」が使われているものが11回ある。

また、「河名」という漢字傍訳の付されたものは『元朝秘史』に107回現われる。このうち、音節 u/ü を含むものは10回あり、名前の音訳に漢字「渚」が使われているのは上掲の5回で、漢字「兀」が使われているものは5回ある。

表7. 『元朝秘史』における漢字「渚」の出現回数とその内訳

使われる語		漢字	例	回数
na'ur「湖」 および その曲用形		渚	納渚 ^𐰺 兒 (na'ur, 海) 捕魚兒 納渚兒 (Buyur_na'ur, 水名 海子) 哈 ^𐰺 禮 ^𐰺 禿 納渚 ^𐰺 刺 (Hariltu_na'ur-a, 水名 海子行)、等。	13
		兀	納兀 ^𐰺 兒 (na'ur, 海子般 07:32:03) 古泄兀 ^𐰺 兒 納兀 ^𐰺 刺 (Güse'ür_na'ur-a, 海子名 海子行) 乞濕 ^𐰺 巴失 納兀 ^𐰺 刺 (Kišil_Baš_na'ur-a, 海子名海子行)	3
固 有 名 詞	傍 訳 「水名」	渚	渚 ^𐰺 札 (Ulja, 水名) 渚 ^𐰺 中灰 (Ulqui, 水名) 渚 ^𐰺 籠古 (Ürünggü, 水名)	6
		兀	兀 ^𐰺 籠古 (Ürünggü, 水名) 中合 ^𐰺 刺 洩兀 ^𐰺 (Qara_se'ül, 水名)、等	11
	傍 訳 「河名」	渚	禿渚刺因 (Tu'ula-yin, 河名的) 渚刺 (Ula, 河名) 討渚 ^𐰺 兒 沐 ^𐰺 漣 (Tawur_müren, 河名河)、等	5
		兀	土兀刺因 (Tu'ula-yin, 河名的) 土兀刺 沐 ^𐰺 漣訥 (Tu'ula_müren-nü, 河名河的) 兀 ^𐰺 中灰 失魯格 ^𐰺 只 ^𐰺 帖 (Ulqui_Šilügeljit-te, 河名)、等。	5

このように、「渚」はモンゴル語の名詞 *na'ur* 「湖」およびその曲用形の第2音節の *u* を表す以外に、湖と河の名前の中の音節 *u/ü* を表記するのに用いられている。ただし固有名詞の表記は必ずしも徹底しているとはいえない。

2-5.

漢字「閤」は『元朝秘史』の全巻を通して23回現れる。その内訳は、モンゴル語の名詞 *e'üte(n)/e'üde(n)* 「門」およびその曲用形の第2音節の *ü* を表しているものが19回、*e'üte(n)/e'üde(n)* の派生語 *e'ütenči/e'üdečin* 「門番」の第2音節の *ü* を表しているものが3回、*ala'un* 「後門」の曲用形の第3音節の *u* を表しているものが1回である（注11）。

(1) 名詞 *e'üte(n)/e'üde(n)* 「門」の曲用形：19回

額閤閤 (*e'üten*, 門 02:09:05, 04:22:10, 05:44:05, 09:47:08, 10:38:09, 10:40:05, 12:10:02)

額閤閤訥 (*e'üten-nü*, 門的 04:22:03, 06:39:02)

額閤迭訥 (*e'üden-ü*, 門子的 09:06:01)

額閤閤圖兒 (*e'üten-tür*, 門裏 01:46:08)

額閤閤突^チ兒 (*e'üten-tür*, 門裏 03:21:08, 門行 07:20:09)

額閤閤突兒 (*e'üten-tür*, 門裏 10:05:07)

額閤閤都^チ里顔 (*e'üten-dür-iyen*, 門自的行 03:21:09)

額閤閤捏徹 (*e'üten-neče*, 門行 04:22:04, 04:23:01)

額閤閤別^チ兒 (*e'üte<n>-ber*, 門裏 03:20:07, 03:20:08)

(2) 名詞 *e'ütenči/e'üdečin* 「門番」(*e'üte(n)/e'üde(n)* 「門」の派生語)：3回

額閤閤赤 (*e'ütenči*, 把門的每 07:20:06)

額閤迭臣 (*e'üdečin*, 把門的每 07:21:02, 把門的 10:05:07)

(3) 名詞 *ala'un* 「後門」の曲用形：1回

阿剌閤納 (*ala'un-a*, 門後行 09:13:02)

これが『元朝秘史』における漢字「閤」の使用例のすべてである。

一方、『元朝秘史』において、モンゴル語の名詞 *e'üte(n)/e'üde(n)* 「門」およびその曲用形は全巻を通じて30回現われる。このうち第2音節を表す漢字に「閤」が使われているのは上掲の22回であり、それ以外は「兀」が使われている次の8例である。

額兀閤 (*e'üten*, 門 10:39:05, 12:40:05, 10:42:10, 12:42:05)

額兀閤突^チ兒 (*e'üten-tür*, 門行 12:37:07)

額兀顛 (*e'üden*, 門 08:43:09)

額兀迭延 (*e'üde-en*, 門自行 02:41:09)

額兀迭帖泥 (*e'üdeten-i*, 門有的每行 08:30:04)

また名詞、e'ütenči/e'üdečin「門番」の曲用形は全巻を通じて4回現われ、そのうち第2音節を表す漢字に「閤」が使われているのは上に見た3回で、「兀」が使われているのは次の1回である。

額兀迭臣 (e'üdečin, 管門的 12:40:06)

さらに ala'un-a「後門に」に関連した語は3回使われており、そのうち「閤」が使われているのは上掲の1例で、他の2例では次のように「兀」が使われている。

阿刺兀納 (ala'un-a, 門後行 05:39:01, 05:39:04)

漢字「閤」が、モンゴル語の名詞 e'üten/e'üde(n)「門」の第2音節の ü を表すための漢字として使われていることは疑いないが、このように使用状況は徹底しているとはいいがたい。表記が徹底しなかったのは、「閤」という漢字が特殊なものだったためではないだろうか。

表8.『元朝秘史』における漢字「閤」の出現回数とその内訳

使われる語	漢字	例	回数
e'üte(n) e'üde(n) 「門」	閤	額閤闌 (e'üten, 門) 額閤闌突 ^舌 兒 (e'üten-tür, 門裏) 額閤闌訥 (e'üten-nü, 門的) 額閤闌捏徹 (e'üten-neče, 門行)、等。	22
	兀	額兀闌 (e'üten, 門) 額兀闌突 ^舌 兒 (e'üten-tür, 門行) 額兀顛 (e'üden, 門) 額兀迭帖泥 (e'üdeten-i, 門有的每行)、等	9
e'ütenči e'üdečin 「門番」	閤	額閤闌赤 (e'ütenči, 把門的每) 額閤迭臣 (e'üdečin, 把門的每)、等	3
	兀	額兀迭臣 (e'üdečin, 管門的)	
ala'un-a	閤	阿刺閤納 (ala'un-a, 門後行)	1
	兀	阿刺兀納 (ala'un-a, 門後行)	2

2-6.

漢字「砢」は『元朝秘史』でモンゴル語の niru'ut (嶺々) に1回だけ用いられている。

你^舌路砢^鼻 (niru'ut, 嶺毎 06:45:03)

この単語は niru'un (嶺) の複数形であるが、『元朝秘史』で niru'un (嶺) に関連した語は、全部で3回現われる(注12)。このうち、音節 u/ü の含まれるものは2回で、「砢」が書かれているのは上の1例で、他の1例は固有名詞と同格で用いられている次の1例で「兀」が書かれている。

^中合迪^黒里^黒 你^舌魯兀訥 (Qadiqliq_niru'un-u, 地名的 06:27:09)

表9. 『元朝秘史』における漢字「兀」の出現回数とその内訳

使われる語	漢字	例	回数
niru'ut (niru'un)	兀	你 ^兀 路兀 ^兀 (niru'ut, 嶺毎)	1
	兀	中合迪 ^兀 里 ^兀 你 ^兀 魯兀訥 (Qadiqliq_niru'un-u, 地名的)	1

漢字「兀」が使われているのは一例だけであるが、もう一方の例で「兀」を使わなかったのは、傍訳にも単に「地名」とあることから、モンゴル語 niru'un (嶺) が意識されなかったためと考えられる。

3.

ここまで『元朝秘史』において、モンゴル語の u/ü を音訳するのに使われている「兀」「鳴」「岨」「渚」「閤」「兀」という6種類の漢字の使い分けを見てきた。これを次のようにまとめることができる。

兀 (4, 265 回) —モンゴル語の音節 u/ü を表記する一般的な漢字として、最も広範囲に用いられている。

鳴 (451 回) —モンゴル語の動詞 ügüle=「話す、語る」の活用形(使役形 ügüle'ül=、受動形 ügülekde=、相互形 ügüledü=を含む) の第1音節の ü を表すために使われている。

岨 (26 回) —モンゴル語の名詞 a'ula 「山」(およびその曲用形、派生語) の第2音節の u を表し、また山名を表す固有名詞の中の音節 u/ü を表記するのに用いられている。

渚 (25 回) —モンゴル語の名詞 na'ur 「湖」(およびその曲用形) の第2音節の u を表し、湖と河を表す固有名詞の中の音節 u/ü を表記するのに用いられている。固有名詞の表記はあまり徹底していない。

閤 (23 回) —モンゴル語の名詞 e'üten/e'üde(n) 「門」(およびその曲用形、派生語) の第2音節の ü を音訳するのに用いられている。

兀 (1 回) —モンゴル語の名詞 niru'ut 「嶺々」の第3音節の u を表記するのに用いられている。

このように、これらの漢字の使い分けは、すべて「モンゴル語の意味を考慮して、意味に関連した漢字を使う」ためのものである。注目に値するのは、これらの漢字の使用は特定のモンゴル語の単語に限られていることである。上に見たように、「鳴」は ügüle=「話す、語る」の、「岨」は a'ula 「山」の、「渚」は na'ur 「湖」の、「閤」は e'üten/e'üde(n) 「門」の、「兀」は niru'ut 「嶺々」の音訳に用いられており、それ以外の場合には意味的に関連がありそうに見えてもこれらの漢字は使われていない。たとえば、モンゴル語の üge 「ことば、語」は意味的には「言葉」や「口」に関連する語であろうが「鳴」の字は使われずに「兀格」と音訳されており、モンゴル語の usun 「水」は水に関連する語であっても「渚」の字は使われずに「兀孫」と音訳されている。

これから考えられることは、モンゴル語の漢字音訳はその場で意味の関連を考えながら行われたものではなく、あらかじめ周到に準備された対訳語彙のリストにのっとって組織的・体系的に行われたのではないかということである。対訳語彙リストは、おそらく『華夷訳語』のようなもので、

説 — 鳴詰列、山 — 阿兀刺、海子 — 納活兒、門 — 額閏闐、言語 — 兀格、水 — 兀孫等々と記されていたことが推定されよう。動詞はあるいは活用形ごとのリストになっていたかも知れない。さらに想像を逞しくすれば、もともとはこれらのリストは『華夷訳語』と同様に

説 — 兀古列、山 — 阿兀刺、海子 — 納兀兒、門 — 額兀顛、言語 — 兀格、水 — 兀孫のように、すべて「兀」で記されていたとも考えられる。ある時点でこれらのリストが、

説 — 兀古鳴詰列、山 — 阿兀兀刺、海子 — 納兀活兒、門 — 額兀顛閏闐のように訂正され、本文の訂正は漢語傍訳を手がかりに行われたとは考えられないであろうか。

[注]

本稿は2005年8月19-21日に中国の呼和浩特（フフホト）市で開催された「中国蒙古学国際学術討論会」における発表をもとに加筆・補正したものである。

- (1) 服部氏の第三種ローマ字転写の c, j を本稿ではそれぞれ ċ, ĵ と表記している。
- (2) ここで扱う「モンゴル語の音節 u/ü」と「服部氏の第三種ローマ字転写の u」とは、漢字に対応する表記および漢字の表す音として等価である。以下のローマ字転写は Ligeti (1971) に若干の補正を加えた栗林・确精扎布 (2001) の方式による。
- (3) 第8巻14丁10行目に「元年」（眞實）とあるのは、「兀年」（ünen）の誤記として「兀」に含めて数える。
- (4) 第7巻34丁8行目に「阿^兀兀刺」（山）とあるのは、「阿兀刺」（a'ula）の誤記として「兀」に含めて数える。
- (5) 第9巻6丁1行目に「額閏迭訥」（門子的）とあるのは、「額閏迭訥」（e'üden-ü）の誤記として「閏」に含めて数える。
- (6) ローマ字転写の中の「=」（イコール）の記号は動詞の語幹と語尾との境界を表す。
- (7) 出現位置は、四部叢刊本の巻数：丁数：行数をコロンで区切った2桁ずつの数字で表す。たとえば「01:33:05」は「第1巻：第33丁：第5行」を表す。
- (8) 用例中のローマ字転写で、「=」（イコール）で終わっているものは動詞の語幹形と同形の命令形を表す。
- (9) 用例中のカギかっこ内の形（[_補]）は欠字を補ったことを表す。ローマ字転写（[t]）も同様。
- (10) 注の(4)を参照。
- (11) 漢字「闐」は服部（1946：140）の第三種ローマ字転写では den としているが、Ligeti の転写では ten となっている。ここでは、しばらく Ligeti の転写に従う。
- (12) モンゴル語 niru'u/niru'un には「背、背中」という意味もあるが、ここでは「嶺」を意味する場合に限った。

[引用・参考文献]

Haenisch, Erich 1937

Manghol un Niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi): Die Geheime Geschichte der Mongolen.
Leipzig: Otto Harrassowitz.

Ligeti, Louis 1971

Histoire secrète des Mongols. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta I.) Budapest:
Akadémiai Kiadó.

Pelliot, Paul 1949

*Histoire secrète des Mongols: restitution du texte mongol et traduction française des
chapitres I à VI*. Paris: Adrien-Maisonneuve.

小澤重男 1984-1986

『元朝秘史全釈（上）（中）（下）』東京、風間書房。

—— 1987-1989

『元朝秘史全釈続攷（上）（中）（下）』東京、風間書房。

栗林均・确精扎布 2001

『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』仙台、東北大学東北アジア研究センター。

白鳥庫吉 1943

『音訳蒙文元朝秘史』東京、東洋文庫。

陳垣 1934

『元秘史譯音用字攷』北平、国立中央研究院歴史語言研究所。

服部四郎 1946

『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京、文求堂。